

(様式2)

校種	⊙・中	学校番号	9	学校名	宇都宮市立陽南小学校
----	-----	------	---	-----	------------

平成28年度 学習指導に関する取組

1 学習指導上の主な実態

(1) 学習内容定着度調査などから

- ・ 国語では、全領域で市の平均を上回っており、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域別正答率は、他の領域と比べて特になくなってきている。しかし、漢字の読み書きや熟語の構成や敬語の使い方はよくできているが、主語や述語の理解はまだ十分でない。「読むこと」については、物語文で登場人物の心情を読み取ることに課題がある。
- ・ 算数では、基礎・基本についてはおおむね良好であるが、思考力や活用力がやや弱い。個人差があるので、個や学級集団の底上げを図ることが課題である。
- ・ 社会科については、全領域で市の平均を上回っているが、資料を読み取ったり考察したりすることが弱い。
- ・ 理科については、全領域において市の平均を大きく上回り、学習内容がよく定着していると言える。

(2) 学習と生活についてのアンケートなどから

- ・ 「勉強はすき」と肯定回答している児童は、低学年では市の平均を上回るが、中学年では同程度、高学年では大きく下回り、学年が上がると低くなる傾向にある。授業への取り組み方については、ほとんどの項目が市の平均を上回っており、おおむね満足できる状況にある。しかし、国語、算数、社会、理科などの教科への関心は低い傾向にある。
- ・ 下学年では「進んで学習に取り組む」と回答している児童が多いが、上学年では市の平均と同程度か下回っている。
- ・ 家庭学習については、低学年では市が示している各学年の目安の時間をおおむね満たしている。しかし、家庭学習の時間が30分以下と回答している児童が、中学年では約半数、高学年では4割程度おり、個人差が大きくなっている。また、復習に取り組んでいる児童の割合はまだ低く、自主学習の内容や質の向上を図ることが課題である。

(3) 授業等への取組状況から

- ・ 「ようなん授業のきまり」をさらに焦点化し重点的に指導に取り組んだり、配慮を要する児童への支援体制を整えたりして、落ち着いて授業に取り組めるような工夫をしてきた成果が少しずつ表れてきている。
- ・ 授業でのペアやグループ活動の取り入れ方を工夫することで、児童の話合いが活発になり、子供たち同士が学び合う姿が見られ、コミュニケーション能力が育ってきた。
- ・ 算数では、学年の実態や単元の特性に応じて、習熟度別コースや少人数指導など、TTの活用を工夫したので、授業に積極的に取り組む児童が増え、基礎・基本の定着が図れるようになった。きめ細かい評価の仕方については、課題が残る。

2 今年度の重点目標

だれもが「楽しく・わかる・できる」授業の創造

～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた国語科の授業づくり～

3 今年度の取組（「学校教育スタンダード」に関する取組は文頭に☆）

- (1) 「だれもが楽しく、わかる授業」の展開に努め、「できる」喜びを味わわせることで、学ぶ意欲を喚起し、自ら学習に向かっている児童の育成を図る。
 - ① 学習に向かう基本的な態度を確実に身に付けさせる。
 - ☆ 「ようなん授業のきまり」を学年の実態に応じてさらに具現化し、スモールステップで確実に定着させる。
 - ☆ 話の聞き方については、授業中だけでなく全ての学校生活の中で重点的に指導していく。
 - ② 学習指導の工夫・改善
 - ☆ 国や県、市で行う各調査の結果を分析し、改善策を検討して指導にいかす。
 - ・ 全教員で、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた国語科の授業づくりを研究し、実践する。
 - ☆ 活動に応じて、ペアやグループなど学習形態を工夫し、共に考え学ぶ態度を育てる。また、グループでは発言できるが全体では発表できない児童への支援を工夫し、クラス全体での練り合いができるようにする。
 - ☆ 少人数、習熟度、コース別など単元や活動に応じて、TT を効果的に活用し一人一人の力を伸ばせるようにする。また、朝の学習のパワーアップタイムの時間に、数と計算等の学習を系統的に行うことで、基礎基本の定着を図る。
 - ・ 各教科の学習と総合的な学習の時間を適切に関連させたり、体験活動、外部講師による出前講座などを効果的に活用したりして、教科の学習内容を広げたり深めたりすることで、学習への興味関心を高め、意欲の向上を図る。
 - ③ 読書活動の充実
 - ☆ 朝の読書の時間を日課表に週2回位置付け、読書の習慣化を図る。
 - ☆ 全クラスを対象に、定期的にボランティアによる読み聞かせを実施し、本への関心を高める。
 - ☆ 学年に応じた必読図書を選定し、担任による働きかけを強化して読書の幅を広げさせる。
 - ☆ 図書館だよりの定期的発行や、うち読カードを使って保護者への啓発を図るとともに、家庭での読書の習慣化を図る。
 - ・ 調べ学習に適した単元や題材を年計に位置付け、計画的に図書の活用技能を身に付けさせる。
- (2) 一人一人の児童が所属感と安心感をもち、自己表現や互いのよさを認め合える集団をつくることにより、自分のよさを発揮して生き生きと活動できる児童の育成を図る。
 - ① 児童の実態調査を実施し、児童の実態を客観的に捉え、指導にいかす。

Q-U・・・5月実施(5年生は5月、12月) 6月分析・指導の手立て
アンケート・・・学期1~2回(教育相談での活用)
 - ② 授業や活動後に振り返りの時間を設け、自分の頑張りや友達のよさを伝え合うことで、自己肯定感を高めたり友達のよさに気付いたりできるようにする。
 - ③ 表現力の素地を育てるため、朝の会でスピーチタイムを取り入れる。
- (3) 家庭や地域との連携を図り、一体となって児童の学力向上に努める。
 - ① 前年度の実施状況をもとに計画を作成し、「読み聞かせボランティア」「街の先生」などのボランティアの協力を得た授業や学習支援を効果的に取り入れる。
 - ② ☆家庭訪問や個人懇談、学級懇談会において、保護者との情報交換を行い、家庭での規則正しい生活や学習習慣について啓発したり、保護者の意見を指導にいかしたりする。
 - ③ ☆家庭学習については、学年に応じた「家庭学習のしおり」や「家庭学習カード」を活用し、宿題の内容や量、自主学習への取り組み方について学年で歩調を合わせて指導し、家庭学習の習慣化を図る。